
去った日常

羅針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

去つた日常

【著者名】

ZZマーク

Z8596Z

【作者名】

羅針

【あらすじ】

現実逃避を願つても、やっぱり日常が好きな青年と、日常を願つているのに、非現実に巻き込まれる少女のお話

「う~さみい」

今日はクリスマス。彼女と呼ばれるものを持つてない暦17年。
名前を古見在じみざいといつ。古見 存。
基本、コミゾンと呼ばれている。

眼は黒、少し赤みがかっている。髪は白。銀髪のほうがあつてい
る表現だ。

銀髪はロングヘアで肩よりちょっとと長いくらい。たまに女の子と聞
違えられるほどの中姿。

容姿端麗、頭脳明晰。女の子が放つておくわけはないのだが、モテ
ない。

クリスマスに独りというのはとても寒い。ましてや、晩御飯を買
に行くとなると億劫になる。

そう、クリスマスツリーのまわりにはカツプルビもがうじゅうじゅ
いやがるのだ。

（ひつそりとしているよー）

心の底で大声を放ち、空を見る
空を雲が覆っていた。

（一雨きそつだな…… それまでにご飯買つておこう……）

ハロ ズまで走る。

「ん~」

背伸びをした。ハーブの近くの公園でご飯を食べて、そのまま立
ち上がり背伸び。

カツサンド3パック、ハムマヨサンド6つ、200g程度の弁当3
0個。

「足りねえな……」

胃袋をどこに持つて行ったのだろう。

この世界には特殊な力を持つた人物が、10人いる。

一人は、電撃

一人は、火炎

といった風に、要は超能力^{サイ}だ。P.S.I.^{サイ}を使えるだけで、威張れるのだ。

コミゾンにはこれといったP.S.I.は無い。

P.S.I.は、

「99%の才能と1%の活力」があれば引き出すことが出来る人間に最初から備わった力だ。

コミゾンには才能があるが、人生に、完全に無気力だった。何をするにも無気力・脱力。モテない最大の理由かもしれない。「何かいいこと起きねえかな……」

夜空を見上げる。いやな予感がする。

ポツポツと雨が降り始めた。

（やつぱりかあ）

帰ろ、と言つて地面を見たその時、

「危ない」

「は？」

上を見るとそこには一人の女の子が落ちてきた。

「うわわわわ」

お姫様抱っこで救出

「邪魔」

ヒヨイッと腕から逃れると、その少女は空を見上げた

「一般人が紛れ込んでるじゃないか、殺す」

「は？」

キュルルルルと回転する矢がコミゾン田掛けて発射された。

キュイイイン！

その矢は兆弾され、打つた男へ戻っていく

「邪魔をするな」

「一般人を巻き込むな」

バチバチと火花を散らす一人。男は未だに宙に浮いている。
サイキツカーカ？

少女は手を前にやると「ブレイク衝撃」と言った。

次の瞬間、少女は空に舞い、男と対決していた。

コニゾンは腰が抜けた立たなかつたが、何とか逃げた。

起きた。朝になつたので起きる。

「なんだつたんだ昨日は？」

独り言をブツブツつぶやいているハリビン。

「……うにゅ」

「……」

（何も見てない聞いてない。）

地面では昨日であった少女が寝転んで熟睡していた。

「さー朝御飯食つて学校行こいづー」

「……私も」

「……」

場が沈黙する。

「返事は？」

「……」

「返事は？」

「いや……その……」

「返事は？つて聞いてんの」

「はい。スミマセン」

「よろしく」

「……」

「……いつ……中一くらいか？」

「何歳？」

「19」

「……嘘だろ？」

バツ！つと食べさせるために持たせていたフォークを俺の眼に突き立てる。

「馬鹿にしたな？」

「スミマセン…」

「よろしく」

「……」

「ふーん ふーん」

出していたサラダとパンと順調に食べ進める少女

「なんでここに来たの?」

「年上だったとは……」

「行くアテがないから」

「……」

（こんな爆弾娘、いらっしゃ……）

「あ、ちゃんと今日出て行くからお構いなく

「あつそ……」

いつのまにか冷蔵庫の前に立つて端から口に詰め込んでくる少女。

「名前は?」

「Qアリーヌ」

「……は?」

「あなたには関係ないわよ。固有記号ナナだからそいつ辱んでくれて構わない

「あんたは?」

「古見 存」

「ミヅン? 本名? それ

「本名だよ」

「そつ」

「んじゃ、俺は学校行くぞ。お前、適当にじつにかいよ

「は? あんたは私とこれからトーナメント?」

「……は?」

「俺は学校行くぞ。そろそろマジで遅刻する！」

「や～だあ デートホークお

「何で、俺に、そこまで、固執するんだ？」

「始めて一緒に寝た人だから（ポツ）」

「誤解を招く発言は止めろ」

「いいよ、25田にもなって学校なんておかしいよお」

一
補修だ

頭いいのに？

「テストはまとめて……？」

「貴方のことなら何でも

俺の名前知らなかつたよな

「おのづかうとおおだだむ」

キャラ変わってるよな？絶対

あ、もう！補修行かなかつたらマジで落第なんだよ！」

「アーヴィングは、少しだけ隠れ隠れ、

「一」が「ジ」あ

「手上の辞書太マニアあるが」

卷之三

卷之三

「本當！？」

「あ。う。

ペアツと顔を輝かせ、笑顔で返答する。

〔ナナは隕石〕で約1.8km。

髪は登んだら秀明感がある水谷

髪は澄んだ透明感のある水色（本当に透明なわけではない）の長めのショートヘア。

寝起きはボサボサだった……

性格は口口口口変わるからよく分からん。

俺はできるだけ補修を長引かせようと決意して家を後にした

補習授業が終わり、学校を出て、腕時計を覗く。

「6:20分。」

流石にどこかへ行こうとは言い出さないだろ。

学校の門をくぐり、近くの信号まで来ると、「ミナトは眼を見張つた。

「……ミナト？ ミナト……？」

信号の反対側でミナトが腹から血を出して倒れていた。周りの通行人（野次馬）がとやかく言っているが、人ごみを搔き分け、ミナトの元に辿り着いた。

「あれ……？」「ミジン？」

「おまつ！ 何してんだ？」

「心配……してくれてるの？」

「当たり前だろー！」

「えへへ……つと……」

普通に立ち上がるとき出した。

「お前大丈夫なのか？」

「平気だよ。これくらいなら。」

銃で撃たれたような傷痕が5～6カ所あるのに……無事？

んなやけあるかあ！

「おい！ 病院に行かなくてもいいのか？」

「うーん……病院じゃ、傷、治らないし。

もう今日は帰るね

「……」

じゃつと行って走つて帰つたミナト。なんだつたんだろ。

家に着いたのが8：40。遅くなつた……
なんだか家に帰りたくないで遠回りしてきた。
絶対無事じゃないよな。あれ。

「あ～ 気になる」

誰にも届かない心配を放つてみる。
その時家のチャイムが鳴つた。

「……」

なんだか出たくないな……出なかつたら物語進まないし、仕方ない
か。

「はーー」

「……んばんわ」

「……ミナト?」

どうせこんな展開かと思つてたけどな。

「私はミナトではない。」

「だつて！見た目とか同じじゃん！」

「私はQ-P-O-10号。固有名ナギサ」

「はあ……」

納得した振りをしておく。

「今日一日泊めてくれ」

「はいはい」

なにこいつひ……口調が違うからいいけどね。密姿同じじゃん！

「んで？今日帰るとか言つてなかつた？」

「それはミナト。」

「そういう問題かよ」

「私もあなたと話してみたかった」

「なんで昨日ミナトが泊まつたのしつてんの？」

「Q-P-O系統は研究所と思考がリンクしている。」

それはQ

の全体で共有できる

「そつか」

「で? 何から話せばいい?」

「何から、というと?」

「お前は俺と話したくてここに来たんだろ?」
「分かりました。一つ相談したくてきました。」

「内容は?」

「私たちQ

を守つてください。」

「私たち?」

「何人いるの?」

「あ……ノつてしまつた。」

「全部で100体います。」

ある組織で作られ、世に放たれたのですが、
脳リンクが出来ることから2体以上捕まえて兵器として
使おうとする組織が後を立ちません。

なので、私たちをその組織から守つてください。」

「なんで俺なんだ?」

「あなたは世界で一番強い「力」を使いこなせるからです」
「……最弱の「テレキネシス」も使えないのに?」

「はい。」

「それじゃあ 使わせてみてくれよ」

「分かりました」

「そう言って俺の腕をつかんだ。」

次の瞬間、視界が一転した

12月25日 ＜深夜＞

「ここは？」

「研究所です

PSI能力開発をしています。」

「ふーん」

至る所で機械が「ウイイン」と唸りをあげている。

「ここです」

「うわっ すげえ」

相当な数のミニナトやナギサがいた。

「全て固有名が在ります。覚えますか？」

「遠慮しておくよ」

「やあ こんにちわ」

「あつ こんにちわ」

研究所の博士みたいな人が握手を求めてきたので握手をした。

今つてこんばんわだよな？」

「君が例の「ミゾン君かい？」

「え？あ！はい」

「それじゃ、こっちに来てくれ」

「はい」

機会がいっそう多い部屋に来た。

「これをつけてくれ」

「なんですか、これ？」

「脳波を一定間隔で狂わす機械だ

君にはセンスはあるのに気力がないと聞いた。

今は役目が出来る。それを強く思い浮かべて

護衛は決定なんだ……

「了解です」

あいつ等を守る……あいつ等を守る……あいつ等……を

「グウ」

「よし」

俺は寝てしまつたようだ

「「」「は？」

「あーおきたあ 今日は補修ないんだよね？」

「うん。」

「私はミナトだよ！」

「」「いつ、初めて会つた朝は性格怖かつたけど……キャラチエンジ？」

「そつか」

「私が能力発動まで指南することになつてゐるから」

「オッケー」

「それじゃ、まずはねえ……」「飯作つて！」

「……は？」

そこにはキッチンと冷蔵庫がある。

「私、ご飯作れなくて……」

「はいはい」

俺も腹減つたしな。

「私も食べる」

「あ！ ナギサはだめ！」

「いいよいよ」

「えーっ」

「ありがとつ

つていうかナギサ影薄いなあ 気付かなかつた。

（1時間後）

炊飯器がなかつたからナベでご飯を炊いている。
神経がいる作業だ

～2時間後～

これで7回目の失敗だ

～3時間後～

米なくなってきたな

～4時間後～

もう何回田だらう

「お腹減ったよ」

「同じく

「俺もだ」

「なんで炊けないの！？」

「んじゃお前がしろよ！？」

「……」

「今日はおかげこじよづか……」

「うん……」

「分かりました」

年上口リコン顔に囲まれて、飯を食べた。

これから、どんなことをするんだら？

12月26日 **▼AM▼**

「無理無理、吐く！」

「逃げるなあ 特訓だああ」

フツ！つと田の前にナギサが現れる
ガシツ！つと腰を掴まれ身動きが取れなくなる
「しまつた！」

「ナイスナギサ！ <炎よ>^{バイル}」

「ちょ！ ま！ああああああ」

「アア つと炎に包まれて焼け死ぬ感覚を感じた。皮膚あちい！」

「殺すきか！？」

「<引力>^{アトラクション}覚える氣あるの？」

「それを言つなら <反発力>^{レブリション}よ」

「どつちでもいいのよ！ ああ 使いなさい」

「んな無茶な！」

「あんたなら出せる！ ああ！ <炎よ>^{バイル}」

「くそ！ <反発力>^{レブリション}！ ぐああああああああ」

失敗。そろそろ死ねるんじゃないかな？

「こんの役立たず！」

「うつせえ なんのヒントも貰つてねえぞ！」

「それなら、先ず、炎を追い払うイメージと、QAOを守るところ

感覚を持つて」

「え？ ああ 頑張る」

「ナギサあ 面白くないじやん」

「今までは効率が悪い」

「知らないよそんなの」

Sめ

「さー <炎よ>^{バイル}」

イメージ.....イメージ.....イメージ.....きたー

「<反発^{レアリシヨン}力>！…」

炎が方向を変え、ミナトに向かう、それをミナトはパイロキネシスを止めて回避

「やつと出来たわね」

「グア！？ グアア」

脳が焼ける…

「ぐああああああああ…」

焼けるような痛み…なんだこれ…

「能力の反動ね。 博士呼んできて」

「了解」

フツ ツとナギサが消え、次の瞬間、博士を連れてその場に現れた。

「やはりこうなつたか。 <治療^{アコニング}>」

ポアアアアつという感覚が頭を撫でる。

徐々に頭の熱が冷えていく感じで痛みは去つた。

「なんども力を使えば慣れると思うから、頑張つてみて
「あ…はい」

以前に「特殊な能力者は10名いる」と言つたが厳密には間違いである

地球の人口を約6億人と考えて1/4、実に2億人の能力者が居る。日本には2300万人だけか?

そして、能力レベルというのが存在する。

・レベル1 <物体移動・テレキネシス>

・レベル2 <炎・パイロキネシス> <電気・エレキネシス> <液体・

アクアキネシス>

<遠距離会話・テレパシー>

・レベル3 <治癒・ヘアリング> <衝撃・ブレイク> <瞬間移動・テレポート>

・レベル4 <予知・プレゴニクション> <千里眼・クレヤボアンス>
<精神読み取り・サイコメントリー>

・レベル5 <重力・グラヴィテーション>

・レベル6 <反発力・レプリジョン> <引力・アトラテーション>

その他

他にもいろいろあるのだが、大部分はこれだ。

そして、レベル5、6を使える人物が合わせて十名。

いろいろな重大機関に勤めているやつらがほとんどだがこの十名が世界のいろいろな基準を決めている。

・能力申請してない能力者が居た場合取り押さえ、罰則
・レベル4の一部とレベル5以上の者は年に一度必ず集会に集まる

・未成年が能力を使う場合、申請が必要である

他にも100も200もあるが、一部だけを提示して見た
俺は17歳だから……申請は？

「大丈夫、出ているわよ」

「！？ ミナト？ナギサ？」

容姿はQPOの女の子が立つていた。

「私はQPO35号、能力はく精神読み取りサイコメントリード」

少し読みませでもらつたわよ」

「……んで？ なんで出ているの？」

「博士が今日中には出来るだらうつて、昨日から3日間の能力使用
申請が出ているわよ」

「そりゃありがたいことで」

用意周到なんだな、」この博士

「QPOっていろんな能力使える人居るんだな」

今は休憩時間で研究所の外のベンチで缶コーヒーを飲み中。

あんまり美味しいな……

「そうよ。く物体移動テレキネシス」からレベル4の大部分まで。

美味しくないなら頂くわよ」

ひょいと缶コーヒーを取られ、飲まれた。

こいつ、大人びてるんだな。

ここで研究が19年行われてるって事かな？

なんでこいつ等は19歳なんだろう？

「信じてたの？それ」

飲み終えた缶コーヒーをく物体移動テレキネシスでゴミ箱まで運ぶ

……名前聞いてないな。

「ああ 少しな。」

「1号から順に年齢は若くなっている。私は18歳」

それでも年上……

「100号は8歳よ」

「ふうん」

「なんで一つの能力使えるの?」

「常人にはきついと思うんだが。」

「常人じやないからよ。」

私たちが生まれた理由は『複数能力者』サイ・プレーヤーの育成。

私たちの脳リンクを普通の人につないで100種類使える人体兵器を作るのがここのお研究所の裏の顔。

博士はいい人なんだけど……利用されてるつぽいの」

「つてことは、お前の能力は別のQPOも使えるつて事?」

「いや、今はく開放モードオープン」ではないから。」

「んじや、なんで使えるんだ?」

「常人じやないからよ……レベル1は全員使える

〈物体移動テレキネシス〉つて最弱つて言われてるけど

本当は使い勝手のいい能力なのよ」

「ふうん」

「こいつでもないのか……」

「なにが?」

「いちいち全部読み取るなよ」

「癖で……ま、私の役目は終わつたから早く入つてきなさいよ。」

博士、呼んでるわよ」

「……早く言えよ。」

俺は立ち上がつた。結構寒くなつたな、ここ

「なんすか？ 博士」

「うむ。君の能力をPP（PSI Point）の制限なし使えるようにしたいと思う。」

「この機械を頭につけてくれ」

「頭が痛くなつたのは……」

「PP許容値を超えてしまつたからだ。」

PPはPSIを使うことで自然に増えていくのだが
君は常人の数千倍つて所か。」

「どんだけだよ」

「PPというのはサイボイントとか言つておるが本来は脳の容量を意味するんだ」

PSIを使うことで脳は酷使されていく。

そして酷使の要領がオーバーしてしまつと、君みたいに頭が痛くなつたり、

視界が悪くなつたり。

やりすぎると死んでしまつたり、体が動かなくなる」

「へー これからする、その機械は何を俺の脳に『与えるんです？』

いやな予感がするんだよな

「脳に無理矢理能力をフル活用させる」

「は？」

「スポー！」と頭に機械をはめさせられる

「大丈夫だ 治癒能力を使つてあげるから」

ウイイインと機械が鳴る。

脳に無理矢理干渉させられていぐ。

「ぐああああああああああああああああ

俺は氣絶してしまつた

「はあはあ」

私は現場へ急行してきた。

私の追つてはさつき潰した。長い戦いだつたQPO思考リンクでいろいろ入つてきただがこつちから向こいつに流すのはNGだ。

現場は酷い有り様だつた。

とんでもない重力で地球をへこませたような感じだ。地球上で何箇所もこの原因不明の超巨大クレーターが出没している。誰の仕業だらう?

これは……レベル7の問題になつてくるわね……

「はあはあ」

俺は手足を拘束されたまま脳が吹き飛ぶ感覚に耐えた。気絶から意識を覚醒させると思考は難しいほどだつた。何を見ても感じないし首も動かない。

体感時間で5時間くらいしてなんとか動くようになつたらそこは酷い有り様だつた。

研究所はぐしゃぐしゃになおり、俺が居るところ以外は陥没していだ。

「博士！？ 博士！！」

「ここにまで能力が強いとは思わなかつたよま、研究所は粉碎だが、QPOは全員無事。私も何とか生き残つたよ」

「俺……が暴走しちまつたつて事ですか？」

「この機械が強制的にそつなるようにしたんだ」

「そう……ですか？」

「博士！大丈夫？」

「アーリング<治癒>のQPO連れてきたけど……」

「大丈夫だ、ナギサ、メルー。」

ナギサは「瞬間移動」で決まりかな

「そろそろこの拘束具、はずしてもらえませんか？」

「このミニゾンは気付いていなかつた。

ミニゾンが地球に及ぼした大災害に……

12月27日 **AM**

「はあ……」

研究所は大破、QPOも結構な被害を受けた。
博士は両足複雑骨折（3日で治るって言つてた）

俺は無傷。

罪悪感が半端無い。

「そろそろ実戦の練習でもしておくかい？」

「博士……なんでこんなに大急ぎでPSエトレーニングするんです？」

「……一刻も早くQPOを守つて欲しいからね」

「なんで俺なんですか？」

俺並みの能力なら他にも沢山いるでしょう

「君だから、だよ」

答えになつてないけどな……

「君は出会つてしまつた。QPO2号、アガサに」

「……まだ話をしたのはミナト、ナギサ、35号ですよ」

「君が一番最初にあつたのはミナトかい？」

「え……それじゃあ24日にあつたのはミナトじゃないんですか？」

「そうだ。あれがQPOの裏切り者、アガサだ」

あいつ…… どうか能力違うもんな。

大嘘つきやがつて、行くアテがないとか言いやがつて

「能力はレベル3でしたけど……？」

「レベルは関係ない。QPOというのが肝なんだ」

「QPOを操る……と？」

「そうだ 1号 100号で上位置換がある。1号が発信した命令

は絶対だ。

2号から100号は従わなくてはならない。

だが1号が死んだら？

「2号が命令の司令塔となるわけだ。」

「だったら1号のミナトが帰つて来いつて命令すればいいじゃないですか」

「2号だけ、命令を無視しているんだ。その原因が分かれば苦労しないんだが……」

「それで、2号から1号他を守るために俺を強くしていると……」

「それだけではない。2号を助け出したいんだ。」

「どこから？」

「ある組織が2号を仲間としている。」

「2号はいよいよ利用されているだけだ。」

おそらく命令の無視はその組織のプログラムだらけ

「その組織からも2号を守れと……」

「そうだ。」

「その組織は？」

「その内強襲していくだらう。教えたまではかちわりに行きやうだからね」

「仕事は早く終わらせたいんで……だるいですね……」

「とりあえず、実戦練習だ。レベル4相手でいいかい？」

「いきなりハードすぎません？」

「いや……きついかと。」

「ま、レベル2といったところか」

「はー」

「んで？ 最初の相手はミナート？」

「悪い？」

「ま、始めましょうか

「く炎よ」

俺は走つてかわす。

今回のルール

・俺は能力をく磁力>しか使つてはならない。

・一撃でも攻撃をあてたらミナートは勝ち

俺は二撃だ。

ハンドつきすぎだわ。

「く爆発」

「く磁力」

地面から砂鉄をひっぱって盾とする。

「やるじょん

「そつちこそ」

なんか……磁力で出来ることないかなあ

「く大火」

「え？ あ、やば！」

「これで勝ち！」

「ちょ！ く大磁場（マグネ・フィールド）」

ゴアアと磁力がここだけ狂う。

炎を動かすことは出来ないけど、さつき引っ張りだした砂鉄が凄い勢いで舞う

大量の砂鉄で一種の竜巻を起こす。炎を弱める

「！」

「くマグネット・ランス

「く砂鉄槍」

24日に襲われたときをイメージする。回転がかかってたな

ギュルルルルと炎を突き破つてミナトの頬を掠める。

「これで一撃だ！」

「……そう。」

なんか……キレたかな？

「戦闘モード」

「は？」

「やれやれ。ミナトは負けず嫌いだからなあ」

博士、冷静に説明しないで！

なんか怖い

「<小火><小火>，，，」

全然ミクロじやねえ。最初に放つた炎並だ！？

「やばいってこれ！？<磁力万力>」

ミナトの周りに砂鉄を舞わせ一気に閉じ込める

これで一撃。

「<大爆発>」

一気に砂鉄が吹き飛ぶ。ぶちぎれじやああーりませんか

「<大火>」

さきほど10倍程度の炎が俺を襲う。なんかいい案ないですか？

磁力……地球も磁力があるんだよな？

地球？惑星？

いろいろと考えをめぐらせる。

「……」「これでいいこう

「<砂鉄球>」

真つ黒で不気味な玉がそこに出現する

「！！！」

炎が俺を襲う

「<大磁場>」

球を操り炎の中に珠を入れる

「<砂鉄球>を核にして、

「<磁引力>」

そこに小さな惑星が出来る。炎が玉に直ひらがつかり潰れていった。

うん、これ必殺技だ

一陣の風が吹く。俺とミナトの間に黒い玉が浮いたままだつた。

「参りました」

「よし！」

ミナトが降参をして俺が勝つた。

それからミナトが俺にそっけなくしたのは言つまでもない

俺の能力は「万有引力」。

引力、斥力（反発力）、磁力である。

俺がPSIを使うだけで地球の引力や万有引力が狂う。

俺の能力は大きいスケールで言つと、地球の働きを狂わすのだ。
悪い表現かな？

次は……？

「私よ」

「35号？」

「固有名はアキ」

「おつけー。」

レベル4じゃん。

「大丈夫よ、私はレベル4でも戦闘向きの能力じゃないから
でもハンデはなしよ」

「そうか……」

「<物体移動>」

地面の石が持ち上げられ俺を襲う

「<反発力>」

360度に<反発力>を行う

バシ！ 痛……

「！？」

「フフフ、あなたの考へていることはお見通しよ

あなたの<反発力>は1:1で空き時間が要る。

今、3秒使つたから3秒の開き時間が存在するわけだ。
その間に石を頬にぶつけただけよ」

「……そうか」

「今の自分を超えないさい

ちなみに一人とも5撃づつよ

「おっけー <大磁場> マグネ・フィールド

「その能力は1:2で空き時間ね、あなたの能力じゃ15秒が限度終わつたら30秒は何の能力も使えない」

前は4秒とか2秒とかにしておいたんだが、同時に能力を使つたりしていたんだが。

磁場を利用して砂鉄を鋭利にしてアキに向かわせるさつ さつ とかわす。

(そうか。俺の攻撃パターンを読んでいるのか)

「そろそろよ」

ふつ テレキネシス と磁場が消え、浮いていた砂鉄が落ちていく

「<物体移動>」

「くつ うつ！」

頑張つてかわすが動く方向まで読まれていてるんだ、2発も喰らつてしまつた

(だつたら……)

俺は考える。あいつの処理が間に合わないくらいの力をぶつければいいじゃないか

「でも、それはあなたに出来ない」

「うつせー」

そんな力をぶつけたらアキは消し飛ぶだろうな

「さて。」

一陣の風が吹く

大量の浮いている石共をはさんで俺とアキが睨みあう
こいつは……結構強い相手だ

実力は均衡していた。

だが常に2手も3手も先を読まれて追い込まれてしまう。
何とか切り抜けても隙を突かれてしまう。

俺は4撃あいつは0撃のダメージだ

「あなたの負けよ」

アキが中傷にもにた笑みを浮かべる。こいつも結構腹黒い性格して
んな。

「……」

（俺には負けしか残された道はないのか？）

何か……いい案は？……重力、引力、磁力、反発力……

「……最後の一手法だ

「……サン・アトランティック・ショーン」

「……サン・アトランティック・ショーン」

「……サン・アトランティック・ショーン」

「……サン・アトランティック・ショーン」

「……サン・アトランティック・ショーン」

太陽の光を捻じ曲げる。虫眼鏡のように紫外線をアキに集中させる。
「考えたわね」
「……テレキネシス」
地面を持ち上げて紫外線に対する盾を作った。

「……」

太陽の光を俺の手に集中させる。
引力の力で手に留まらせる。

「……」

土が邪魔でく精神読み取りサイコメントリー」
が一瞬切れていたようだ

「……ブレット」

「……サン」

「……サン」

「……サン」

手をアキに向ける。引力の力を手からアキに一直線に放射
集中していた小さな太陽はアキの頬を掠めて飛んでいった
研究所の瓦礫にぶつかると一気に溶けてなくなつた
なんという熱量

アキの頬も焼け爛れてベリベリと剥がれていた

「……フフ。覚醒したわね

任務終了よ 降参」

「……？」

「あなたのセンスと力を引っ張り出すのが私の任務だつたから」

「大丈夫かい？アキ。」

「大丈夫です ヘアリングをしてもらえば幸いです」

「了解だ」

なんだかパンドラの箱を開けてしまった気がする

「アガサよ。今回の事件、どう思つ?」

「レベル5以上の仕業だと思います。私の考察はレベル7の出現を考えるのが妥当かと」

「レベル7は私以外存在せぬ。レベル6で最近覚醒した奴等を探し、処分するのだ」

これだけの力は放つておけばレベル7にも覚醒しかけない。私たちの野望の敵となれば大きな損害になるだろう。見つけ出して仲間にするのだ」

「承知しました」

面倒くさい仕事を頼まれた……

この大男はブルーム・ファンクス。地球上唯一のレベル7 PSI協会の上層部もそれを認めた超超能力者だ。どのような力を操るのかは見たことがない。

「して、いつごろに搜索を始めればよろしいでしょうか?」

「31日、大晦日でよかろう。見つかるまでは一般人を血祭りにあげる」

「……承知しました」

逆らつたら即死。一般人を巻き込むのはあまり好きではないのだが

「それでは下がつてよいぞ、アガサ」

「はつ!」

これから3日は休養だ

ゴミゾン君は順調に力をつけてきた。

レベル6を認められるほどに。

多種多様な応用力。諦めない精神力

そして、あの力。

このまま行けば、今存在する基本的な100種の能力者の弱点と攻

略法、

そして、強大な力をつけることが出来るだろう。

あの……ファンクスの組織の幹部たちには敵うだろう

「博士！ 次は誰が？」

「ウム……一旦^{一時}飯休憩にしようか」

「分かりました」

今 アクアキネシスく液体^{アクアキネシス}の能力者と戦い終えた。

「……一旦^{一時}飯休憩にしようか」

博士の声だ……腹へつたあ

俺はおにぎり（Q^Qの誰かが作ったおにぎり）を貰いに走った

【0:00】任務開始

ビルの最上階から飛び降りる

そして、能力を最大限に視界に入る人物に向ける

「がは！？」

「きやあ」

一般人が苦しむのを見て心が痛む。

（関係ないのに……）

こんな私を止めて欲しい、助けて、とはもう言い飽きた。

どんなやつが私を助けに来てもやられて重労働させられて罵声を浴びられ

精神が肉体をやられて死んでしまう。

そんなのをもう見たくなかった。私は自我を出来るだけ心の深くに閉じ込めた

私の能力は2点、座標・座標を設定。からに向かう衝撃を起こす。

PPを込めた分だけ向かう力が大きくなる。

今は心臓のの前にとを作つて衝撃、心臓が麻痺して死亡。

着地するときに足の裏に、着地点に。着地する寸前に弱めに発動。

軽くピヨンっと飛んで自殺は免れる。

「てめー、何してんだ？」

追っ手か……めんどくさいなあ

能力者は常に体からPP放出しているから座標がものすごいぐぶれる。基本、私がトドメをさす。

私は裏手で小刀を手にとつてその男と対峙した。

「ハリゾン君、おきて！」

「んー？ 博士？ どうしたんです？」

「例のスクランブル交差点でやはり襲撃が起つた。

組織の幹部か、2号だ」

「行きます！」

例の、とかやはり、とは、前々から襲撃が起つるかも知れないと予測していた場所だ
もちろん、く予知^{ブレコニクション}で出していた場所だ。

「よし、QPOを適当に2、3人連れて行かせるから先に行つていってくれ」

「了解です」

（弱かつたわね）

男はそこまで強くなかった。く精神読み取り^{サイコメントリー}の使い手だったけど
<物体移動^{テレキネシス}>も使えないんじゃ、能力の持ち腐れよ。

後ろを向くと、どこかで見た顔をした男がいた

「アガサ、帰るつもりはあるか？」

「なぜ私の名前を知つている？」

「ま、いろいろあつてな」

「帰れ、一般人であるう。殺したくない」

私は血まみれの剣を片手に脚に能力を込めた

「一般人じゃねえよ。お前に助けられた

次は俺が助ける番だ」

（そうか）

こいつは24日あたりで出会つて巻き込みたくないと助けてしまつた奴か

「だつたら去れ。それが今お前の出来る一番の行動だ」

「断固拒否する

俺はお前を守れ、助け出せ、と頼まれてるんでなあ
パパッ つと終わらせたいんだ、帰るぞ」

「そんな気持ちで仕事をするな、死ぬぞ」

「殺せよ。それでお前が博士の下に戻るなら
俺は喜んでこの身を投げ出そつ」

「殺す、だが帰らない」

「そーかよ 全く。後悔するぞ」

「どつちの台詞だ」

ポケットに手を入れて氣丈に話す奴がにくい。
あいつは6日前までは力を持つていなかつた
いける。レベル5くらいでも使いこなせないはずだ。
「さてと、援軍来てないけど引きずつても連れて帰るぞ」

「やつてみろ」

私は脚に能力を込めた。

「かてねーぞ」

「かてねーぞ」

自信はある。アイツの能力は衝撃。

一度見た。〇〇〇に同じ能力者は居ないが博士に弱点を教えてもらった。

弱点とは能力者に向けると座標がぶれるのだ。

「勝てるわよ」

直接俺を狙つて衝撃を打つてくることはないだらう。

俺の能力は 座標と 座標を設定。

引力なら へ

反発力なら (が のある方向と反対に動く)

の設定も出来るが上位的な能力に使う。

ゴオワ！ と地面が上に引き出される。

俺はそれに逆らわず、上空に飛ばされる

「 く 空気弓 」

俺の腹にとんでもない衝撃が入った。

「 が……はあ 」

上げられた上空から3・4mほど飛ばされ、俺は息をついた

「 あなたがどんな能力かは知らないけど

熟練度では私が上。

動くな、オゾン層からあなたの背中を打ち抜くわよ

蹲つて腹を抱えている俺は上から狙われているようだ。

「 空気弓 」

は敵の前の空氣に

それに向かつて打ち出したい方向と反対に。

衝撃で、空氣が押し出され、衝撃が入る。

かわせたものは居ない。

完全に狙っていたなら確実にそこに当たる。

今は奴の背中に、オゾン層と同じほどの高さに、を置いている。

てめえ、強いなあ

でもなあ……負けたくないんだよ……」「

アーヴィングの手には黒かむらさきか判別しに

バースム・トライアングル

「真空三角形」……!!

エアードアーチ

特大の「空襲」を発射する

△は空僕があたり 無は帰している

「これは特別製でなあ……」

「 真空で捻じ曲げられ、引力で捻じ曲げられ、遠心力で捻じ曲げられ、ものは混ざり、空氣に四散するんだ。」

ビンゴ！ 万有引力

正角 [

彼の周りに10台の「空氣」を設置。

一気に放射

一 < 真空四角形 > 一

彼の周りに先ほどの三角形と同じ色をしたものが現れる。

「攻撃は通じないぞ」

冷静になれ。今回の任務はレベル6の発掘。

ならばこいつがそうであろう。任務開始

「白旗を揚げる！」

「 そ う か 。 ん じ や あ 帰 ろ う 。 」

「さて、私たちの組織に入らないか?」

「断固拒否する。さ！帰るぞ」

腕を掴んで引っ張る。

「何をしている。」

「...?」

そこに組織の幹部、魔幻視エネアリーが立っていた
「てめえが組織のリーダーか?」
「答える義理はない」

「どこに連れて行くんだよ！」

さつき現れた男がアガサに触れたとたんに10mほど先のほうに飛ばされた

思わず宙に浮いている腕をどけた。

でも違和感が残る。

向こうに連れて行かれて一瞬、感触が残っていた。

手を離していなければずっと触っていたかもしない。

「私の名前はエネアリー、

君を撲滅しに来た。」

すると腕（手首から先）が飛んできた。

「うわあ！？」

バースム・トライアングル

「リアル・ハシナトリー」

「現幻」だ

「想像」

「幻術」！

「違うんだな」

すると切れなかつたはずの腕が俺の頬を殴りつけた。

「ぐつ

「現幻」だ

「聞いたことねえな

「しらねえよ！」

浮いている実際に殴つた腕を切つた。次も切れなかつた。

「無理だ」

「ちつ」

睨みつけた。

「大丈夫！？」

アガサと同じ顔の少女が現れた。
見た目じや見分けがつかない

「アキだ」

「ナギサ」

なんとなく性格同じだな。よく話す奴を出してくれたんだな、博士

「その人は？アガサと誰？」

「エニアリーさんだつてよ

「……」

もしかしたら……アキが居ればこの能力、攻略出来るかもしんねえ

12月31日 <AM> (後書き)

ちよつと不具合がありまして、後日、書き足します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8596z/>

去った日常

2012年1月5日20時54分発行